

||||| 現代の世界文学 |||||

William Melvin Kelley

DANCERS ON THE SHORE

岸辺の踊子たち

ウィリアム・メルヴィン・ケリー
浜 本 武 雄 訳



20th CENTURY

集英社

現代の世界文学

DANCERS ON THE SHORE

岸辺の踊子たち

William Melvin Kelley

浜本武雄訳

集英社

DANCERS ON THE SHORE

by William Melvin Kelley

Copyright © 1964 by William Melvin Kelley

Japanese translation rights arranged through

Charles E. Tuttle Co. Inc., Tokyo

© 1973

現代の世界文学

岸辺の踊子たち

昭和四十八年九月二十日 発売
昭和四十八年九月二十九日 発行

訳者 浜本武雄

発行者 陶山 巖

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 株式会社集英社

一〇一 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ十

電話(265)六一一(代表)

振替東京 一五六五三

定価 六九〇円(落丁・乱丁本は本社でお取りかえいたします)

〇三九七一一二〇四〇一三〇四一

他人の本の献辞を読むと、その献げられた人というのはどんな人物だろう、その人が著者にたいしてどんなことをしてやったお返しとして、こうもうやうやしく著書が献呈されるのだろうか、いつも考える。読者のみなさんも、そういうことをお考えになったことがあると思うので、私がこの本を献じたいと思っっている私の祖母のことを、ちょっと紹介させていたきたい。

私の祖母は今から七十年前にニューヨークに出てきた。縫物が上手だったので、以来裁縫で身を立てるようになった。この二つの事は、四年前のある出来事を理解するのに役立つと思う。

当時、私は作家になる決心を固めたばかりだった。周囲の人たちは私をもっと安定したちゃんとした職業を選ぶと思っていたし、ものを書きたいという欲求はそもそもが漠然とした青臭いのぞみであるから、誰かにたいしてその点についての説明をする必要があるような気がしていた。また、当時唯一人の肉親であった祖母がもし理解してくれたら、他人からまともな仕事につかない理由を聞かれても、ちゃんと対抗できるような感じもあった。

坐って祖母に話しながら、なにぶん六十も齢がひらいていることだし、ものを書くということについて自分が考えていることを話してわからせることはとてもできないだろうと、内心は思っていた。

三十分間、祖母は縫物をしながら、じっと私の話を聞いていた。さまざまの理由や説明や実例を話したあげく、私はついに力つきた感じで、ぐったりした。自分でも何をいつているのかわけがわからなくなってしまうていた。

祖母はしばらくじーっと私の顔を見て、話がすんだのをたしかめた上で、にっこりと笑っていった。「わかったよ。わたしだって、好きでなきゃ、とてもこうして七十年間も服を縫っちゃいけないよ」

その祖母、ジェシー・ガルシアに

尊敬と、感謝と、愛をもって

はしがき

アメリカ作家で、たまたま黒い肌をもって生れてきたものは、次のようなユニークな問題に直面することになる。「いわゆる黒人問題の解決策や解答が、その作品に含まれているのではないか、と読者から往々にして期待される」ということである。彼の著書をひらいたとたんに、読者は熱心に、そしてしばしば純真な関心をもちながら、今日アメリカの白黒兩人種間に起りつつある問題についての鍵になるもの、或いは答がありはしまいかと探しはじめるのである。

この本については、私は社会学者でも、政治家でも、民衆の代弁者でもないことを、念のため断っておきたい。解答をだすべく努力するのは、そういう人たちの仕事である。作家は、むしろ疑問を提出するものであるべきだ、というのが私の考えである。作家は人間そのものの姿をきわめていくのが仕事であって、人間のかたちを藉りた諸々の象徴や思想を説明するのではない。

私はアメリカの黒人である。なおその上に作家たり得ていれば幸いであるが、この判定はおそらく私のなしうる限りではあるまいと思う。

W・M・K

目次

リバティ街でたった一人の男	九
敵の縄張り	三五
ポーカー・パーティー	三九
リーナ・ホーンにや似ても似つかねえ	五五
アギ	六七
祖母の家	七九
聖パウロと猿たち	九五
酔っぱらった水夫	一二七
偉人とすごしたクリスマス	一三九
コニー	一五一
召使の問題	一八三
カーライル兄貴	一九五

救われた魂

二〇一

雪 搔 ぎ

二一九

美しい脚

二二三

ぼくのために泣け

二四七

短篇と長篇の交錯するところ

二七五

岸辺の踊子たち

……いや、彼らに限って、人間以外のもの
であるはずはなかった。だが実は、そのこと
がいちばん厄介なのだ——つまり、彼らは人
間以外のものではありえないということが先
ほどのようにふと疑わしく思えてくる、その
ことである。その疑念はゆっくりと人の心
に忍び込んでくる。あの踊子たちは、絶叫
し、跳びあがり、クルクル廻り、いかにもお
そろしげな顔をつくってみせたりした。だが
見ていていちばんおそろしいのは、この連中
はいかにも人間である——自分とかわらぬ人
間である——という思いにかられること、自
分の血もこのすさまじくも激情的な怒号と実
は遠いところでつながっているんだという思
いがしてくることだった。ひどいといえどそ
れまでだが、その場合、ほんとに人間であれ
ば、あの叫喚に含まれていた非常な真率さと
かすかながらも相呼ぶものが、自分の体内に
あることを認めたのではなからうか。そし
て、自分にも——太古の夜の闇を遠くへだて

た今にすむ身でありながらも——理解可能な
或る一つの意味が、ひょっとしてそこにはあ
るのではないかという、おぼろな疑念を認め
ただろうと思うのだ。だって、そうではない
か？ 人間の心は何だって容れることができ
るのだから——あらゆるものがその中には収
まっているのだから。すべての未来同様、過
去だって余さずはいっているはずだ。それに
しても、あそこにあつたものは、結局、何だっ
たのだろうか？ 歓喜か、怖れか、悲歎か、
ひたすらなる帰依か、豪気か、それとも怒り
か——見当もつかぬ——だが、そこには真実
——時間という被膜をはぎとられた真実のあ
つたことはたしかだ。心豊かなものなら、あ
れを見て仰天し身ぶるいもしようが——人間
ならばわかるはずだ。まばたきもせずに直視
できるはずだ。だがそのときは、すくなくと
も、あの岸辺で踊っていたものたちと同じく
らいに、人間になり切っていないくてはならな
いだろうが。

コンラッド『闇の奥』より

リバティ街でたった一人の男

その女の子は家の前の庭にしゃがみ込んで、真鍮のスプーンで地面を掘っていた。そこは海のつもと、向うには短い黄ばんだ花のはえた島々があった。着ている赤と白の縞柄の服がだぶついているために、両脚はかくれて見えない。春はまだ浅かったが、彼女ははだしだった。足の先が裾から突き出ているのでわかる。その男の姿に彼女はまだ気がついていない。男は馬にのってリバティ街をこちらへやってくるころだった。がっしりした肩。着ているダスター・コートが馬の臀しりをおおってひろがっている。鞍頭くらがしらに皮ひもでくりつけたビロード地の旅行鞆が彼の片足にコトンコトンと当たっていた。馬からおりて、黒人の頭部をかたどった小さな、黒い鉄製の馬つなぎに手綱を結び、旅行鞆をおろしたときになって、女の子は、はじめてその男に気がついた。じっと見守っていると、男は木戸をあけて庭にはいってきて、女の子をじっと見おろして立った。その顔はきびしく、大きな帽子のつばのかげになって、ほとんど灰色に見えるほど色つやがなかった。

女の子はその男を知っていた。彼女の母親は男のことを、ミスター・ハーダーと呼び、ジェニーに、あれはお前のお父さんよ、といったことがあった。黒い服を着込み、糊のきいたワイシャツと大きな黒いネクタイをつけて、馬にのってリバティ街にやってくる男たちは何人かいた。彼はその一人

だった。男たちには行きつく家がそれぞれあつて、たいていの場合夜、それぞれの家の中へ姿を消すのだった。リバイ街の住人は女と子供に限られていた。そして、みんな黒人だった。真黒な女たちも何人かいたが、大半はコーヒー色の肌をしていて、美人ぞろいだつた。女の子の母親は、ほとんど白に近い肌の色をしていた。背がたかく、黒い眼で、髪はその上に坐れるほど長くのびしていた。

彼女を見おろして立っているその男は、一週間に一回ないしは二回やつてきた。朝、ジェニーが起きだすときまでいたことは一度もなかった。背がたかくすらりとした金髪その男は、短いあごひげをはやしていて、そのひげは今彼女の足もとにある芝のようにゴワゴワしていた。眼は青色で、ジェニーの眼の色と同じだった。彼の英語があまりうまくないことについて、あの人は海の向うからやってきたんだから、と母親はいった。それじゃ、うちへ来ないときは、その海の向うへ帰っているんだろうか、とジェニーは何度も思つたものだ。

「ジェニー、お前、私がどうして泊らないのかつて、母さんにきいたそうだね？　そうかい？」

ジェニーは顔をあげた。「ええ、ミスター・ハーダー」彼のあごの毛は、頬にはえている毛よりも黒かつた。

男はうなずいていった。「これから、ずっといるからな。母さんと呼んでおいで」

スプーンを泥の中のこして、女の子は家の中へかけ込み、長い廊下を走っていった。それまで日なたにいたせいで、廊下が暗く見えた。母親は左手に大きな黒い銀の蓋ふたをもち、右手には木のスプーンをもつて、ストーブの上におおいかぶさるようになつて立っていた。額には汗のつぶがうかんでいた。長い黒のスカートと白いブラウスを着、腰までとどくほど長い編んだ髪が、背中の真中に垂れていた。ジェニーの走ってくる足音に、彼女はふりかえつた。

「母さん、あの人、わたしのお父さん、でしょ。今、庭にいるの。旅行鞆を持って」

母親は最初にこつと笑ったが、眉をひそめてげげんそうな顔をした。「旅行鞆ですって？」

「そうよ、母さん」

女の子は母親のあとについて表のほうへ行つた。途中、母親はホールの姿見の前で立ちどまって、片手を首のうしろへ上げて、おくれ毛をなおした。二人がポーチへ出てみると、男は腰をおろして、小さな庭や境界の濃い緑の葉をつけた生垣をながめていた。旅行鞆がそばにあった。

両手をエプロンの下に入れて、じつとその鞆をながめながら、母親は立っていた。「ミスター・ハーダー？」

男はふりかえった。「今度はもう帰つたりしないよ。どんなことがあつても、だ。本当の家庭とはどんなものかを知るために、ここへやってくる俺が、どうしてあんな家で暮すことがあるかっていうんだ」まるで問題に答えるかのように、彼は一人であらずいた。「そうだよー俺はここにくる。あの家はいつに呉れてやるさ。金だけは送つてやつて、俺はここにいるんだ」

しばらくの間、母親はものもいわずに立っていたが、やがて戸口のほうを向いていった。「すぐ夕ご飯にしますわ」網戸をあけた。戸のバネがキーツと音をたてた。「あら」彼女は戸をもった手をはなして、鞆をとりあげた。「これ、わたしが持つてはいります」内へはいる母親が前を通つたとき、ジェニーは、彼女がまた微笑んでいるのが見えた。

そのことがあつてから、ジェニーの母親は、リバティ街の有名な人になった。よその女たちは彼女を呼びとめて、男のことをたずねるのだった。「あの人、ずーつといるの、ジョウジー？」

「そうよ」

「けんかしない」

「ええ、したことはないわ」

「あの家の名義をあなたのものにして貰っておくことよ。シッシー・マークハムみたいな目に会わないようにね。おぼえてるでしょ、旦那が死んだらその日のうちに、白人女がやってきて、シッシーと子供たちをドブン中へ叩き込んだじやないのさ。ね、家の名義はあなたのものにさせなさい。わかるでしょ？」

「ええ、そうするわ」

「それで、どんな調子？ 前とは違って？」

母親はぼおーっとした顔つきになる。「そうよ、違うわ。あの人ったら、自分のことをメナードって、名前で呼べっていうの」

近所の女たちは、それを聞くと、きまって仰天してしまふ。

最初はジェシーも面喰った。男は朝になつてもちゃんとして、時には彼女を起してくれることもあった。母親はもう男のことをミスター・ハーダーとは呼ばなくなり、どうかすると——ごくたまにではあったが——彼のいうことにたいして、「ノー」ということさえあった。それまではその男のいうことにたいして、たとえどんなことにでも、母親が「ノー」という返事をするのを、ジェニーは聞いたことがなかった。

あの人はほんとにお父さんなのだ、と信じるようになり、ジェニーは、やがて男のことをパパと呼びはじめた。

そのころになつて、毎日のように家のあたりを馬車にのつて通りすぎる白人の婦人があった。ジェ

ニーにはそれが誰やら何が目的なのやら、見当もつかなかったが、庭で遊んでいると、乾いた土の道をとぼとぼと歩むまだら馬にひかれて、その婦人の灰色に塗った馬車が町角を曲り、やがてゆっくりとこちらへ向ってくるのを、彼女はじーっと見守るのだった。鞭を握りしめ背すじをのばした、黒いお仕着せ服の黒人の馱者が、馱者台に坐っていた。その白人女は、さも番地か、なにか特別なことでもたしかめるような恰好で、家のほうをのぞくようにして見るのだった。カーテンのおりた窓のあたりを誰かを探すようにじろじろ眺めるかと思えば、ジェニーの顔をじーっと見たりした。その顔つきは、親切でもやさしそうでもなく、女の子のことで何かよくないことを知っているぞといわんばかりの、きつい、怒ったような顔つきだった。

そのうち、或る日のこと、黒人の馱者が手綱を引きしめたと思うと、その馬車がとまり、白人の女が身をのりだして何やら馱者にいって、小さなピンク色の封筒を渡した。馱者はとびおりて木戸をあけ、ジェニーには眼もくれないで、黒い顔をテラテラ光らせながら、玄関口へ行き、三段ある階段をのぼっていった。革の長靴がうつろな音をたてた。彼は網戸をひらいて、あいている戸の真中についた真鍮製の呼鈴の取手をねじった。

女の子の母親が手をふきながら出てくると、馱者は封筒をさし出して受けとらせた。受けとりながら彼女は、ちらっと表の馬車と白人女のほうを見た。白人女は冷ややかな眼つきで見返した。馱者がひき返すと、母親は手紙をひらいて読んだ。唇がかすかにふるえた。そして眼頭がキラッと光ったのをジェニーは見た。戸口の四角い暗い空間にかこまれて立つ母親の姿は、背がたかく色白で、黒髪が耳をおおうように垂れ、眼が濡れて光っていた。

ジェニーがふりかえると、白人の女が座席にふんぞり返るのが見えた。と思うと身をのり出して、

まるでジェニーの父親のような男っぽい口調で、金切声をあげた。「どうだい、私があの連中に頼んでお前たちをどうして貰おうとしてるか、わかっただろう。あの男にいつておやり。女房は一人しか持てないんだってね！ お前なんか、女房でもなんでもないんだからー」そういうと女はまたふんぞり返って、手袋をはめた手をふって馭者をうながした。馬車はガタゴトと動きはじめ、そのうちスピードをあげて、町角を曲って見えなくなったが、しばらくのあいだ音だけは聞えていた。

ジェニーは立ちあがって、階段をとんととのぼっていった。「母さん？」

「遊んでなさい、ジェニー、遊んでなさいといったらー」白人女をのせた馬車がまだ家の前にとまっているかのように、母親はじーっと表をみつめていた。手には、これから読みはじめるような恰好で、手紙をもっている。眼のはしが濡れていた。やがて彼女は家の中へはいり、その背中で、網戸がキイと音たててしまった。

最近では夕方になると、ジェニーは庭の木戸のところで、父親が町角を曲り、歩いて帰ってくるのを待ち受けるのが習慣になつていた。はじめは、ひよっとすると今日は町角を曲ってくる姿が見えないのではないかと思う気持ちも同時にあったが、父親が毎日きちんと帰ってくる日がつづくと、そういう日の可能性はだんだん薄れていくような気がした。それでもなお、今でも父親の姿が見えるたびに、彼女ははっとなるのだった。そういうとき、彼女は手をやつと肩のところまでおすおすとおげて、ほんの指先だけちよこちよこと動かすような恰好で、手をふるのだった。その様子はまるで、わずかな風のそよぎが美しく揃った羽かざりのならびを乱してしまうように、自分が大きく手をふることで、父親がこちらへやってくる情景が壊れて消えてしまうのではないかと恐れているかのようであった。